熊本大学教育学部紀要、人文科学
第五二号、二三四―二四八、二〇〇三

日本印人研究

―山田正平の生涯と芸術（Ⅰ）―

神野雄二

一　序

印学は、印章や篆刻を対象として、これを科学的・総合的に研究する学問である。印章は古代メソポタミア文明に端を発し、東西文化圏に伝播し、欧亜大陸のほぼ全域に広まった。印章は七千年の歴史を有しており、他の文化や芸術などの諸領域との関連も深い。[1]

日本の最も初期の印章は、隋唐時代印制の影響のもと所成された。時代が下るに従い、その形姿・印風に別趣の風格がみられるようになる。一七世紀以後、中国から黄檗禅僧がわが国に亡命し篆刻を移植した。その後文字の学問の隆盛と相俟って多くの印人が活躍するようになる。わが国において最も篆刻芸術が高揚したのは、明治後期と昭和前期である。

さて日本や中国における印章や印人に興味を持ち、それへの史的考察を研究テーマに据え論考を発表してきた。研究の緒についた昭和五十年頃は、まだ篆刻に対する理解も少なく、研究者も殆ど存在しなかった。ただ小林斗盦、新関欽哉、水田紀久、荻野三七彦、神田喜一郎、中田勇次郎、三村竹清などの諸先碩によるご業績は、歩むべき道筋を指し示して下さっていた。私の研究は、日本の印人の研究、主として高芙蓉[2]（一七二二―一七八四）を祖とする芙蓉派の一系譜、源惟良、小俣蠖庵、福井端隠、山田寒山、山田正平等の印学の継承とその発展を明らかにすることを課題としている。本稿はその一翼を担うものである。

近年篆刻は、茨城県の古河市に篆刻美術館が平成三年（一九九一）に開館したのを契機として注目されつつある。また小林斗盦先生の文化功労賞のご受賞も篆刻が世間に認められる大きい要因になっている。

確かに篆刻はまことに小さい小宇宙芸術ではあるが、東洋の美の粋が結晶したものであるといえる。ミニチュア芸術の最たるものである。日本における印学の研究、なかでも印章や篆刻そして印人や印譜の、広い視野に立った体系的な研究は、まだこれからと言えよう。そして日本の印章や篆刻は、様式面や、形象面からその特質が研究されるべきであろう。[3] 印学の研究は、歴史考古学の対象としてのみならず、文化史、書史、美学・美術史等その裨益するところは甚だ大きい。

さて本稿で取り上げる山田正平は、日本の篆刻の祖として「印聖」と称される高芙蓉の系譜に連なる昭和前期を代表する印人である。清朝以後「詩書画」三絶の文人活動は、文人必須の条件として詩・書・画に加えて篆刻を加えている。これらは四絶としてその一体化された文人活動がなされて、始めて文人の理想郷に到達できる。つまり一つでも欠けると、文人としての教養は成り立たないとされている。本稿では四絶の芸術境を目指し、終生孤高の境地を保ち、篆刻芸術に命を賭した山田正平の生涯とその芸術について述べる。なかでも旧稿以後過眼した正平に纏わる研究文献資料の提示と、彼の若年期の生涯と芸術に関して言及したい。

凡例

一、漢字は通行字体に改めたが、原文のままとしたものがある。
一、仮名遣いは原則として原文を尊重した。
一、判読し難い箇所は□で示した。
一、誤字、脱字、衍字と思われるものも、原文通りにし、適宜傍に（ママ）と付注をした。

二　年譜、系図並びに研究文献補遺

山田正平に関して過去三度にわたり年譜を編み系図を作成した。ここに列記しておく。1が最も詳細なものである。筆者は山田家に蔵される正平が描いた画帖の書き入れを含んださらに詳しい年表を用意しているが、改めて紹介したい。

1、山田正平年譜　山田家系図（『改訂増補版山田正平作品集』木耳社、一九八四年七月二十日）
2、山田正平年譜　山田家系図（『山田寒山・正平展図録』篆刻美術館、一九九二年十一月三日）
3、山田正平略年譜（『墨』通巻一五二号、芸術新聞社、二〇〇一年十月一日）

その後新たに判明した事柄を追加しておきたい。（1）の年譜の補遺は、主として山田家の過去帳と戸籍謄本によった。

(1)年譜、系図

○貞参尼の戒名は、祖心庵實如貞參尼である。
○山田潤子（寒山）は、山田丈助の次男である。
○寒山の戒名は、自得院寒山宝潤居士である。
○原田宗八の「宗」字は、「惣」字である可能性がある。
○ツネの生卒は、明治元年十月二十日である。
○ツネの戒名は、常心妙貞信女である。
○正平は昭和三七年八月十六日〇時一六分、東京警察病院三一五号室にて死亡する。
○正平の戒名は、萬象院永楽一止居士である。
○喜美子の没年は、昭和六二年十二月一日である。
○喜美子の戒名は、慈心院小雨貞美大姉である。
○壽美惠の出生は、明治三五年十一月二六日である。
○壽美惠の没年は、昭和三四年六月十二日、午後一一時四二分である。
○壽美惠の戒名は、釈妙江信女である。
○恭子の戒名は、恭心妙敬信女である。
○朗はジャワスラバヤへ渡る途中マカッサル海にて戦死と、東京民生局福祉部世話課の川畑氏より通知される。
○朗は第七飛行師団司令部陸軍少尉で、セレベス島マカッサル港西北約三里海上にて戦死する。
○原田豊富の没年は、昭和三一年三月二二日である。

一

○田村二十一の没年は、昭和二九年四月十二日である。
○木村軍平はオ（ナ）リンスクにて死亡する。
○木村幸平は昭和四十年七月二八日四時三〇分、川崎にて没する。享年五九歳。
○石塚清一の没年は、昭和二三年二月三日である。
○北島龍太郎の没年は、昭和二八年二月八日である。享年二四歳。
○原田鶴造の没年は、昭和十六年三月十二日である。
○大関菊太郎の没年は、昭和二一年一月二六日である。享年七六歳。

(2)事蹟、顕彰

○「山田寒山・正平展」が篆刻美術館において開催される。[4] 平成四年（一九九二）十一月三日～平成五年（一九九三）一月二四日
○『一止道人印譜』五〇部編まれる。発行者山田潤平、平成十二年（二〇〇〇）七月吉日
○『墨』通巻一五二号において、特別企画山田正平の世界が特集される。芸術新聞社、平成十三年（二〇〇一）十月一日
○『月刊絵手紙』第七一号において、山田正平文人画が特集される。日本絵手紙協会、平成十三年（二〇〇一）十一月一日
○鳩居堂画廊において山田正平展が開催される。平成十四年（二〇〇二）十一月六日～十一日

(3)研究文献

○『堤清六の生涯』、内藤民治編著、曙光会、昭和十二年（一九三七）八月一日
○中西慶爾「清狂の人・一止道人」、『墨』通巻五、芸術新聞社、昭和五二年（一九七七）三月一日
○高原哲「篆刻家木村竹香小伝」（『はくぼく』、刊行年等不詳）
○拙稿「山田正平の巨印」、『金石書学』第四号、藝文書院、平成十三年（二〇〇一）六月一日
○拙稿「日本印人研究―山田正平の詩―」、『広島文教人間文化』第二号、広島文教人間文化学会、平成十四年（二〇〇二）三月三一日

○拙稿「日本印人研究—山田正平の書と書論—」、『文教国文学』第四七号、広島文教女子大学国文学会、平成十四年（二〇〇二）九月二十日
○拙稿「山田正平研究—周辺の人々とその交流（1）—」、『広島文教人間文化』第三号、広島文教人間文化学会、平成十五年（二〇〇三）三月三一日
○岡村浩「越後路の篆刻家・山田寒山〔I〕～〔V〕」、『新潟大学教育学部紀要』、新潟大学教育学部、一九九六年～一九九八年
○岡村浩「越後路の篆刻家・山田寒山〔6〕」、『新潟大学教育人間科学部紀要』、新潟大学教育人間科学部、平成十年（一九九八）九月三十日
○山田潤平編『正平文人画』、日本習字普及協会、平成十三年（二〇〇一）十一月六日
○柿木原くみ「山田寒山—二木島・最明寺時代を中心に—」、『相模国文』、第二十七号、相模女子大学国文研究会、平成十二年（二〇〇〇）三月十日
○柿木原くみ「北條卍山論—熊野における山田寒山師承—」、『相模国文』、第二十八号、相模女子大学国文研究会、平成十三年（二〇〇一）三月十日
○柿木原くみ「山田寒山の交友—尾崎紅葉と小平雪人を軸に—」、『相模国文』、第三十号、相模女子大学国文研究会、平成十五年（二〇〇三）三月十日

三　生涯

1、弱年期

山田正平は明治三二年（一八九九）二月一日、新潟県新潟市古町通り四番町六四四番に生れた。父は篆刻家木村政平で竹香と号した。母はマスである。正平は大正二年（一九一三、一五歳）の頃から父の元で篆刻を始めた。本名は正平で一止、一止道人と号した。一止は「正」字を二分したものである。斎号を更生居又は一止廬と号した。若年には、幾盦、更生、更生道人、邵平と称したこともある。正平の号に関して一つの逸話がある。渡辺秀英著、増補改訂版『会津八一逸話集』（新潟日報事業社、一九九九年二月）に次のように述べる。同著は渡辺氏と八一との交流の中での聞き覚えを基としている。

山田正平は、本名は正平、字は正平、号は正平で通している。だが、一度はほかの号をつけたことがある。蘇庵というのだ。

大正十二年の大震災にも幸いに焼け残り、一命も無事で蘇生の思をしたので、蘇庵と私が号した。そしてその印を山田正平に頼んで作ってもらった。やがて印が出来ると、正平はそれを持参して来た。私にさし出してそれからいうのだ。

「さて、仰せの如く蘇庵という印は作って参りましたから一応先生にさし上げます。それにつきまして甚だ勝手なお願で申訳ございませんのですが、私は今まで号を持たないでいたところ、この蘇庵という号は如何にも私の気に入りましたので、何とか私にお譲り下さるわけには参りませんでしょうか。」

私もせっかく自分でつけたものだけれども、そう言われてみれば致方もなく譲ることにした。

その後程なく市島春城が遊びに来て、話のついでにふとこんなことをいい出した。「坂口五峰が胃癌だといわれて非常に心配し、その後東京で治療をし、誤診だとわかり漸く元気になった。ついては此の喜びを記念し、後々ともに健康でいるようにというので、蘇庵と号したいといっているが、如何なものであろう。」とのことだ。

これには私も驚いたり弱ったりした。それで私が、自分が既に蘇庵と号し、更に山田正平へ譲ってやった事情を話してやった。春城も驚いて、早速この事を五峰に伝えたら五峰も弱ったのだったね。交渉して来たけれどもこちらで応じないでいたら、とうとう料亭へ招待されることになったものだ。

春城が聞き役で、私と正平がお客として招かれ、酒をのんでしまった後で、正平が「私は蘇庵を譲るのは不承知だ。」と言い出したのには弱ったね。たいがい御馳走になってしまえば承知したものと考えているのに、途中ならまだしも、終ってしまってからの不承知にはさすがの五峰も全く弱ってしまった。こちらは既に譲ってしまった後なのだから、

いわば所有権はない。既に所有権は先方のもので、如何に自分が作ったものだからといってあまり文句も言えるものでもない。

坂口は、自分の病気が治り、今後を祈ってのこと、命にかけての願なのだから、何とか折入って承知願いたいと頼む。春城もさまざまに取り成すけれども、正平は頑として応じないのだ。

私も「会津蘇庵、坂口蘇庵、山田蘇庵と、こう蘇庵ばかりでも人が困るではないか。」というと、山田正平の言葉がすこぶるふるっている。

「蘇庵については将来に人が審判を下すでしょう。」

結局、一番有名になった人が蘇庵ということになるということなんで、これには手がつけられず、会はそれでおじゃんになったわけさ。

正平はこんなにまでして獲得した蘇庵をその後どう思ったのか止めてしまって、またもとのまま正平で通している。これもまた変わっている。

こんなわけで、坂口の印には「更生蘇庵」などという印が蘭八によって刻されてあるのだ。この三蘇庵で弱っているところへ、いま一人、私の家に書生のようにしていた安藤が、蘇庵と号したいと言い出した。鑑真和上伝で博士になった安藤で、本名は正輝というのだ。

会津蘇庵、坂口蘇庵、山田蘇庵でも持てあましているところへ、また蘇庵ではいよいよやりきれない。そこでこれはしかたなく更生とした。安藤更生がそれなのだ。

蘇庵の号を正平が使用した作品は、今のところ一点も見出せない。この文中の「蘇庵」は「更生」とも考えられるが不明である。ただこの事に、坂口守二氏は『会津八一と越後の文人』（新津郷土資料研究会、一九八一年十二月）の第四章「文墨の人・坂口五峰と八一」に見解を示す。これによると、坂口五峰は号として更生道人を用いたいと念願したが、既に山田正平がこの号を八一から贈られていることを知り、同じ意味を示す「蘇」を用い、蘇庵と号したのではないかと述べる。

また正平は更生、更生居と号している。これに関しては『会津八一全集』第八巻にとられた大正十一年三月二三日阪口仁一郎宛書簡の中で触れている。これから「更生」の号の顛末が分る。

さて又春城老人より承り候へば今後更生道人の御号を用ゐらるべきよし、つきては実は小生数年前矢張り更生の二字をひねり出し寒山寺の正平に命じて印を刻せしめしことありしに、正平また此号を欲しがり候為め、乞ふがまゝに其まゝ与へおき候ところ、其後或は更生と款し或は於更生居など款したる篆刻も少からず出来いたしたる筈に有之候。現に小廬にかけおく楹聯にも更生の印を刻出いたしあり。かくては折角意味ある御号にも触れて妙ならずと存候へども如何ともいたしがたく候。小生が更生と申したるは会朔を晦朔ともじり、晦朔即ち更生とひき出し来りしわけにて一片の洒落に過ぎず候。

四

山田家に蔵する『高青邱詩醇』（豊住書鋪、嘉平三年）に会津八一の識語があるが、「更生居、正平愛之」とある。これは、辛酉十月二日に八一から正平に呈されたものである。辛酉は、大正十年（一九二一、二三歳）の時である。正平がこの号を使用した作品に、木額「緘口勿云々」が存し、その款記に、「乙丑四月、製於更生居、正平」とある。乙丑は、大正十四年（一九二五、二七歳）の時である。

正平が幾庵、更生と号したことは、山田家に遺された画帖から知られる。これは、花卉を描いたもので、款記に、「昭和四年五月九日、幾庵写」また「更生又署」と識されている。昭和四年（一九二九、三一歳）の時である（図1）。

また正平は邵平と木額に刻している。大正七年（一九一八、二〇歳）杜甫詩「岳陽楼」を刻したもので、その款記に、「岳陽楼杜子美、戊午秋日、邵平作」とある。

彼は生涯一止道人の号を多用するが、現在確認し得た最も初期の使用は、山田家に遺された「百合図」の款記、「癸酉七月一止道人并題」である。癸酉は、昭和八年（一九三三、三五歳）である。

また会津八一が大正八年（一九一九）三月三日付の坪内逍遙宛の書翰において、次のように述べていることから、正平は本名の正平を号の如く使用したことがわかる。確かに印の側款に、正平刻と刻されたものが多見される。

山田寒山旧臘病死致し候につき、かねて御印逍遥一世を刻せしめし木村正平と申す少年を後継者とその養子となさんとて、徳富蘇峰、河井筌廬、滑川澹如の諸君よりしきりに所望し来り候。小生も至極同意なれば近々其運びに至らしめ、早速上海に送りて彼地現存の第一人たる呉昌碩の教を受けしめんと存じ候。幸に彼の将来の為めに彼の名を御記憶被下

度候。

木村正平。号も亦た正平に御座候。

実際養父山田寒山から大正四年（一九一五、一七歳）に、白文印「木村正平号亦正平」の印を刻されている。

ここで会津八一と木村竹香との関係について弱冠触れておきたい。会津家と山田家は非常に近く、両家は懇意にしていた。八一は終生篆刻に注目しており一冊の書物にしたいと考えていた。八一が篆刻に興味を抱いたのは、この竹香に追うところが大きいと思われる。八一の書簡で最も早く竹香のことが表れるのは、明治三十年十二月六日の伊達俊光宛の書簡、「予が新刻の図書之章御高評被下度候。刻者木村竹香新潟之人、山田寒山と友としよし。」（植田重雄編著『秋艸道人会津八一書簡集』恒文社、一九九一年一月）である。

次に八一が竹香に贈った俳句が「高田新聞」に掲載されている。明治四二年五月二日である。

篆友木村竹香この頃其居をうつして新居の句を需むるに応じて、

机据て新居の春も暮れにけり

春光や瑪瑙を刻む刀のさき

鉄筆を握れば遠し鳴く乙鳥

店さきや印ほる耳に飛ぶ燕

（和泉久子著『新資料付注会津八一書簡集』笠間書院、一九六八年二月）

山田家に八一の俳句が二句書き残されている。

羅漢寺やさくらの上の月一つ　八朔郎

木村竹香子に羅漢の句を問はれて

花ちりてひくれ白いなるら可ん哉　朔

八一がなぜ正平をそこまで庇護したのか、次の一文「書道について」（『会津八一書論集』長島健編、二玄社、一九七六年五月）から明瞭である。いくらか八一の脚色も感じられるが、略ぼこのような経緯であろう。

さう致しますうちに、或る時下宿へ帰つて見ると叔父から手紙が届いてゐる、また書道のお小言かと思つて封を開いてみますと、

これまで私は兎角お前の字を非難して来たけれども今日からはやめた。どうか今までの処は悪しからずお許しを願ひたいことが一つ起つて来た。といふのはお前も知つてゐる木村竹香といふもの―数年前に亡くなりましたが新潟の古町通五番町に木村竹香といふ版木屋があつたのであります―がこの間来て、私は判を彫るのを業としていろいろな人にお近づきを得てゐますが、気にいつた書き手を見つけて、自分の名刺を書いてもらつて、それでツゲの判を彫つて一生涯名刺として刷つて使ひたいと思つてをつたけれども、自分の胸にピッタリする字に未だ會つて出会つたことがない。ところがお宅の八一さんといふ人の字は、私が年来希ふところの字にピッタリしてゐる。それで、どうか一つお宅様から序いでの時に「木村竹香」といふ四字をお書き願ひたいといふことを願つて頂けないでせうか、といふことをいつて来た。さういつては何だが、私はともかく市内では名筆であるといはれてゐるのに、私のことは何もいはずにお前のことを願つて来るので、私も、これは悪いことをした、八一に向つて今までまことに不適当な意見を加へてをつたといふことがわかつた、誠に相済まなかつた。

といふ意味の手紙を叔父からもらつたのであります。私がその手紙を見て、いろいろな感情が起つたであらうことは申すまでもありません。生まれてからはじめて私は自分の字を賞められたのであります。

木村竹香が私の字のどういふ所を感服したのか、後日よく問ひ質してもみませんでしたけれども、君は日本においても、僕の字を初めて賞めてくれた人だといつて、私はよく茶のみ話にしてをりましたが、だからお前の子の正平は一生涯私が指導してやる。正平を必ず有名な男にしてやる。といふことを私は口に出して申したこともあるし、実際今でもさう思つてゐるのであります。

山田正平と申しまして山田寒山の養子になつて、今日まづ日本の篆刻界では新しい、といつても彼も相当の年輩になりましたけれども、今日も私は何かと相談を受けて彼のために致してをり、時折正平にもそのことを申すのでありますが、お前の親が、何人もけなしてゐる私の字をはじめて賞めたのである。お前も一つもつと偉くなれといふことを、赤ん坊に対する如くに私は常に申してをるのであります。

さて木村竹香に関して以前紹介したが、[5] 本稿では新しい知見を新資料とと

五

もに紹介する。木村竹香の生涯を通覧するに、基本となる資料は次の四種である。一は竹香の戸籍謄本である。二は横野春松が月刊誌『北溟』（昭和十一年十月十日）に「人物春秋十二、名人木村竹香老人」として述べた一文である。三は新潟大学助教授岡村鉄琴氏の論考である。四は高原哲氏が『はくぼく』に掲載された『篆刻家木村竹香小伝』である。本稿はこれら諸氏の論考に負うところが多い。

筆者はかつて正平のご令室の喜美子氏から、「竹香さんはとにかく几帳面で真っ正直であり、曲がった事は大嫌いであった。」とのお話をお伺いした。この証言は次に引く一文からも分る。

竹香の業績は、篆刻の制作と、邦人印譜として屈指の名譜である『羅漢印譜』[6]の刊行に代表されるが、その仕事は実に緻密で繊細である（図2）。

山田家に印譜や写本、また彼の生涯を知る上で格好の資料が遺されている。ここに新史料を二種提示したい（図3）。その一は、『写意弐』で、「酔古堂印」の押印のある写本である。酔古堂は竹香の斎号である。これは三〇丁からなり、縦二四・五cm、横一七・二cmである。内容は印章や篆刻作品の模写で、他に古瓦硯の拓本、大江平次郎の御用標章などを貼り込んでいる。その二は、『舞花積雪二』で、「酔古堂印」の押印のある写本である。三六丁からなり、縦二四・五cm、横一七・〇cmである。内容は当代篆刻家の篆刻作品の印影、他に岡本椿所の転居通知葉書、泉布の拓本などを貼り込んでいる。

筆者が以前に竹香について函館在住であられた、正平の兄軍平の妻木村キクイ氏に書簡でお尋ねした折の返書から、竹香が昭和十八年に没した際、篆刻に関係するものは山田家に贈られたということが判明した。そこで、羅漢印もその折に木村家から贈られたものと推測できる。

木村竹香の生涯を知る基本資料は先に掲げたが、中でも横野春松が「北溟」に書いた「名人木村竹香老人」は重要である。ここにいくらか長文であるが、全文を引用しておきたい。

木枯らし枝に鳴る師走の寒空、関も押し迫つた去年の暮。昭楽軒の街燈の下、女給共が送り出す酔余の老体黄門様のお帰へーり。頭に葛巾を戴き、手には蘇州の寒山寺、羅漢竹の細杖、黄表の十徳にチヨツピリと山羊鬚、黄門様主客唯一の忘年会のお帰へりである。一歩は高く一歩は抵く、蹌踉蹣跚たる御姿、御光がさゝぬが不思議なり。之れが所謂大隠は市に隠るるで木村竹香老其人なりとは知る人ぞ知る。

老は白根の産、何分にも名人固気の老のことであり、どうも商売には不向きなり、老自身も小口の細工に自信はあれど、親父が許さぬ。それを今武蔵野学園の学監をしてゐる甥に当る田村二十一氏が、間にあつて救解し、礼物を整へて当代の名工大江萬里の門を叩かせた。萬里は岡田旭堂と共に後越印刻界の恩人である考試二昼夜、中年者は道具にならぬと入門相叶はず、悄然として帰へる様の老ではない直様上京、龍の雲を得たのが帝室技芸員香草中井敬所の門である。名人が名人の卵子を教ゆるのだから上達は早い、刻苦一年有半、香の一字を許されて竹香と号し、門戸を張りしが古町は三番町大江萬里の真向ふなり、老も中々乙な事をやるものである。

すると萬里から頼みに来た。俺は職人でないから出仕事はせぬ、依頼は宅へと返事が如何にも鷹揚だ。黄揚の印材大小十数顆、何づれも県のもので面倒の品、老は快刀心の行くまゝ刻り上げて返へせしに萬里一見驚嘆、之れは只物でない、一年や二年修行の運刀ではないと、深く自己の不明を耻ぢたりと云ふ。名人の進歩は格別のものである。かくて一日一顆を刻すれば一顆、数顆を刻すれば数顆、之を印譜白紙に捺し書留郵便にて師敬所に送りて其叱正を乞ひ、十年の久しき一日たりとも之を欠かさず、其精勵の功大に見るべきものありと雖も、流石に敬所も其根気には閉口せられしと云ふ。吾曹記念として時計の贈与を受く。裏面の贈辞は老の刻するものにして凡器凡を脱しニツケル忽ちプラチナとなる。

老の廉潔は司直の知る所となり、印章判定の嘱□受けてゐた。一断犯罪の有無を決するもの其職責や重大也。断ずれば日当五円分らぬときは三円而して老は三円口常に多し。司直更に人を求むれば、老は推挙する仁を知らずと云ふ。老来業を廃する第四銀行其技掬を惜しみ、行印全部の彫刻を依頼した有利の仕事ならん老は言下にお断りをした。重役が何に一時にせぬともよし忙しき時は人頼みせよとの懇命なるも老は請負は出来ませぬと、とうとお断りした。其志や高く其行や清し。そして虎さん〳〵と云ふ時分から知つてゐるのだから、私を贔負にして下さるなど感謝してゐる。実に高山流水の観ありだ風格技術既に然り、書法書道の妙趣亦群を抜くものあり。会社重役の公印等になると、垂脚、方折、円

折、瘦字、肥文、五体位は書くが、老は七体でも九体でも、悉く書き得る学力がある。又詩趣の造詣深しと見え、桐陰五峯詩宗の坐には常に老の姿が見えた。

老は骨董を愛翫する事も徹底してゐる。蒐集幾十百点、それが全部差押を喰つた。老も失神せん許りに驚いたが、致方がない。道を以てすれば君子も欺かる、老の事だ去る人に泣きつかれ、額面も見ずして印を捺した、それが昔の三百円であつた、其結果だ。中に黄揚の佛壇がある、老の機構を越中の角平の高弟が入念に造りしもので、老と集の名前が梁中にある筈だ、今は市内某富豪のものとなつてゐるが実に逸品である。

まだ一つ重宝がある。之は市内の名人づくし、百年の後は国宝ものだ。市に鈴木八十吉と云ふボウフラ造の名人がゐた、此人なら屹度土を持つてゐると老が尋ねた、九尺貳間の裏店に、棕梠縄を張りて戸を仕付けて置くと云ふ居宅である。壁は落ち障子は破れ畳は床が見えてゐる。何もかも部屋一つ、流石は名人唐机が一脚キチンと室にある之には老も感じ入つた。八十吉君が喜んで惜気もなく鷹の子の土を呉れた。其土で島田亮斎に、十六羅漢の印材の注文をした。亮斎も老の事だから快諾する、快諾したはよいが十年立つても印材が出来ぬ。お仕舞に亮斎が俺の手にあまると言ひ出した。之には老も屁古垂れたが、亮斎の妻君の激励でどうやらこうやら出来上つた。印障は寒山が刻るのだ、其運刀の迅速なる、十挺の印刀を磨ぐに間がなかつたと竹香老の嘆声、之を紫壇の龕に入れて、扉には濱村藏六が金石結緑　瓦礫放光の八字を書し、老が筆致を趣きして刻り込みしに、錦上錦を加へ津々たる味が出た。後年藏六之を見て其筆者を尋ね加工の秀麗我を凌ぐものありと嗟嘆せりと云ふ。折柄此地巡錫中の永平寺の監院星見天海師が、開眼式を挙ぐると云ふ大評判、御蔭様で瑞光寺では、授戒が二時間後れたそうな。名人名僧達の為さる事は実に悟入徹底したものである。此龕丈ヶが不思議、其厄を免れて、老の二男正平が之も名人の卵子で二代寒山其縁で今は寒山寺の什宝になりてゐる。

老の長男軍平君と三男幸平君が日露漁業の相当□所に居る課長が久太郎を一瞥した本願寺の坊主を真似た訳でもあるまいが、君等は一人の老父を新潟に置くと云ふ事だが、お呼びしてはどうかとの託宣、軍平君も気に懸けてゐた事、老も寄る年波北海落ちを覚悟して、立つ二ヶ月も前から移転の張札をしたものだ。徳有隣老の事、町内では、行形に、鍋茶屋に、金子に三度も送別の宴を張つたが、何時も老が泣いて計りゐて挨拶が出来ない。アノ御面相で之は見て置きたかつた。泣きの涙で北門に渡り、函館郊外のとある逆旅の一室を借り、悠然として老を楽しみしが、病鶯を摑まされて人情の険悪を知り半夜に聞く□字の一声。故郷忘れ難く帰心矢の如し、飄然として帰郷、橋もあり柳もあり杖の留め処、日和山は御成街道回向院の副住職に衲りてゐる。時々頼まるゝ犬の引導には、観音経も知らぬ老の事弱り切つて居らるゝ由。

老少時呉服行商の折、神保西水翁の留守宅に出入し奇しき因縁で翁が十四五歳の作、五十嵐々渓の新邸慶落の記文と翁が仙台大槻盤渓の学僕たりしとき、薪を採り、水を汲み、飯を焚き、酒掃応対一切の学僕では、とても読書の寸暇がないから、何とかして江戸に出たいと小国の半紙に虫の子の様の細字で、九尺もある厳君への願状を持つてゐた。老の事だ之は自分の私すべきものでないと思ひ、翁の郷里曾根（ママ）の知人に贈り、其保存法を講ぜしに、一は赤塚の中原家より神社に衲められ、一は嗣子盤次君の手に入るべきものが、之は入手せられざる由。実に老らしき行り口、しかし三両の月賦参拾両で刻らせし乾漆の盆。表は鐵哉の刀で出山の釈迦、裏は藏六の刻印二つ、参百幾拾両で勿体つけて売り飛ばした。無慾の様で利も見える。老は新免二刀の有無流か知らん。此頃名越初代の釜を掘り出して、大屋の宗現寺が寺宝にするから奉納せよと厳達しても中々云と云はぬ、日夜其松籟を聞いて、山羊鬚を撫しつゝ悦に入りてゐる。

今茲春、悠々として古稀の春を迎へし老は、何に感じたか寿筵を開いて心の友を招待した。回向院階上三間を連ねたる書院、左日和山を見て日本海の涛声を聴くべく、明恵上人らしくの戒自筆の阿留返幾夜宇仁の額面の下、御自慢の釜が□々の音を立てゝゐる。書画骨董処狭き迄飾り立てたる中、先づ苦茗を啜りて古今を談じ、酒池肉林に遊ぶと云ふ趣向。高松の浜焼に興津の乾鯛、之□に北海の鮮を加へ蔬菜は郊外蒲原平野の産、酒は灘の生一本、書くさへも喉から手が出る甘梅なり。お客は宗現寺瑞光寺の和尚長老小僧山文主人以下、接待役は庭師の星さん。至れり

盡くせりだ。本文の記者も籠招を蒙りてゐた。伴ひに来た山文主人が、紋服に珠数を瓜繰りてゐる。何んだと聞けば、実は老が寿筵を兼ねて葬式を出して置くと云ふ趣向。成程読めたりお客の顔触れ、それに暮六つから丑の刻までも、呑み通すといふ豪僧の間に、涓滴用ひざる先生のお仲間入りは、酒肴扱にされてお困りでせうとの事で遠慮した。老来多幸此の如きも。中年の必逼、寒夜風雪に目覚めし正平君が、お父様、お顔の色が尋常ではありませんと、童心にも厳戒を与へた事があるそうな。往時はすべ□夢の跡、今也日和山麓回白院裏、濤声と松風の間に、余生と樂しむ黄門様人生も此に至りて意義あるものとなる。

この文中に述べられているように、竹香は晩年、長男軍平、次男の幸平が勤める日魯漁業の関係で函館に移り住んだ。その折の引っ越しの挨拶状は次に掲げる文面である。

拝啓　尊家益々御多祥に被渡奉慶賀候　降而老生儀年来の持病難患も島田医院長の懇切なる御診療に依り次第快方に御座候へども未だ全快に至らず候処　此程子息等（母妙英尼）の三十三回忌法要を営辨の為め孫兒とも〳〵来会そのこと修了

これを機会に病躯を我等兄弟に任せ函館に静養をと切望致志候　郷土の尊く辱けなさ各位の深甚なる御芳情茲にまた十年愛護訓育を賜り分外至極只管感銘拝謝に堪へず候　情去り難く御座候も子息等の意に任せ急々身辺の玩具雑器を片着け次第更に兒等の迎を待ち渡函杉並町一八三、或は松蔭町一七四の両方へ随意住居致すことに決定仕候

一々参庭拝芝の上御礼申述ぶべきの処身体不自由にて甚失礼ながら書中御挨拶迄我儘勝手何卒御寛恕願上候

頓首

竹香事

木邨　政平

横野が述べているように、竹香は、函館に移り住んだものの、しかし、長年住みなれた故郷が忘れられず帰郷し、回向院の副住職となった。昭和十一年の春には古稀を迎え、自らの葬式を兼ねて寿筵を開いている。昭和十六年夏頃まで回向院の羅漢窟に住んでいた。その後再び函館に渡り、竹香は昭和十八年（一九四三）一月二八日に没す。享年七七歳であった。竹香晩年の肖像二種を本稿末頁に掲載する（図4・5）。同年二月十五日会津八一は竹香の死を傷み、「般若心経」[7]を霊前にささげた。竹香の墓地は、新潟市西堀通六番町・祐櫛山浄泉寺境内にある。浄泉寺は浄土真宗大谷派である。墓銘は「倶會一處」と正面に刻まれており、台座部に「竹香居」「木邨」とある。また右側面には「大正二年七月十二日」、左側面に「釋妙英　釋竹香木村政復修」とある。

ここに葬儀通知を掲げる。これは北海道新聞の昭和十八年一月二九日、三十、三一日付けにて掲載された。

父竹香議豫而病氣／療養中の處養生不相叶七十／七歳の高齢を以て一月廿八／日午前八時永眠致候間生前／の御厚誼を拝謝し此段御通／知に代へ謹告仕候／追而葬儀は三十日午後零／時三十分自宅に於て告別／式執行可仕候尚乍勝手通／夜の儀は御辞退申上候

一月廿九日　杉並町一八三

男　木村軍平

幸平

東京　山田正平

友人総代　山田繁造

外親戚友人　一同

御會葬御禮

一月廿日　杉並町一三八

木村軍平

木村竹香の文章は多く遺されていない。むしろ殆んど存しないといえる。そういう意味で次に掲げる二件は重要といえよう。これは元新潟新聞紙上に掲載されたものであり、其の後鏡淵九六郎（一八六九―一九四〇）が『新潟古老雑話』として昭和八年六月十五日に出版した。それが更に平成三年五月十九日、新潟明治大正文化研究会代表の蒲原宏先生監修のもと新潟県民俗学会から覆刻出版された。

八

この新潟新聞の同記事の切り抜きが山田家に遺されている。それによると「青山碧山翁」は「続古老雑話、一二五」に、「三大家の合作」は元は見出しが「羅漢印と三大家の合作」であり「続古老雑話、一二六」に掲載された事がわかる。また新聞記事とはいくらか文字の異同がある。

さてここで山田家に所蔵される山田寒山関係の新聞記事の切り抜きを貼り込んだ新聞資料を紹介しておきたい。(8)（仮に寒山の新聞切り抜きファイルを『寒山新聞』と呼ぶ。）これは寒山研究にとって一級の資料である事はいうに及ばず、当時の芸壇の風流を知る上で欠くことが出来ない。これを読むに彼の生涯、芸術観、芸苑での逸話などがあり興味は尽きない。現在新聞資料の見出し一覧の索引を作成中であるが、同資料を精査し、いずれ寒山の伝記、芸術（詩、書、画、篆刻、陶芸）また当時の芸壇、印壇の様子など論じてみたいと考えている。いずれ同資料は全てを翻刻したいとも考えている。この新聞資料の見出しの索引をぜひとも作られてはとアドバイス下さったのは元跡見学園女子大学教授柴田光彦先生であった。

新聞記事は当時の時事情報を得るに最適な情報源である。ただ保存となると量と紙の劣化の問題がある。最近ではマイクロフイルム化が進み閲覧が容易になってきた。明治時代の主要な新聞記事を集めた集成版に、『新聞集成明治編年史』全十五巻（財政経済学会、一九三四～三六年）がある。更に『明治ニュース事典』全九巻（毎日コミュニケーションズ出版部、一九八三～八六年）があり、明治期の情報が得られる。また新聞目録も参考になる。

『新聞集成明治編年史』の第十五巻は全巻索引となっているが、「山田寒山（潤）」「寒山寺云々」「篆刻」「楽焼」などの項目に寒山に関する記事が見られる。

寒山に関する資料で公刊されたものはそれほど多いとはいえない。山田家に遺されているものが根幹をなそう。中でも最も重要と言えるのが、当時の新聞の切り抜きファイルである。山田家に蔵されている『寒山新聞』は数冊にわたっており、寒山に関する事跡を切り抜き、ファイルされたものである。切り抜きは、東京市京橋区采女町廿二番地にあった東京切抜通信社によるものである。新聞は全国紙に亘っており、重複する記事も多い。また新聞は古く劣化がすすんでおり、文字不明の箇所や、新聞名さえ判読できないものが数多くある。この『寒山新聞』から寒山に関して、以下の諸問題が解明できそうである。これらに関しては何れ新聞記事に即して紹介してゆきたい。

① 生涯
② 書・画・篆刻作品
③ 詩、随鴎吟社同人との詩の応酬
④ 篆刻学・印学
⑤ 楽焼き、陶友会について
⑥ 墨竹十万講について
⑦ 健筆会について
⑧ 蘇州寒山寺の新梵鐘再建について
⑨ 日本寒山寺について
⑩ 寒山と伊藤博文
⑪ 寒山と良寛
⑫ 寒山と滑川澹如
⑬ 寒山と富益斎
⑭ 寒山と前田黙鳳

またその他に関しては、以下に関わる記事が掲載されており、日本印人の事蹟の欠を補える。

① 濱村蔵六五世について
② 中井敬所について
③ 山田正平弱年印
④ 名家印とその評語

さて、木村竹香の文章は次の二件である。これから『羅漢印譜』制作の動向が伺え興味深い。そして如何に竹香がこの事業に執着したかが見て取れよう。

(1) 青山碧山翁　日和山畔回向院　木村竹香翁　六十六歳

私の長男は函館で実業に従ひ二男は東京下谷の山田寒山師を襲名して篆刻に従事してゐるが私は新潟が気分にピッタリするので、孤独生活を

覚悟して再住することにした。新潟の美術家としては青山碧山を挙げたい。此人は若松生れだが父に従ふて、若年から新潟東堀七番町に移居し、早くから明清漆器の制を究め、箔絵沈金等の唐物細工を好み、漆に作つた種々結構のものを遺され、又白漆を工風(ママ)し碧紫等を案出された。読書の趣味も高尚で手に古本を放たず、新聞は遠ざけて読まなかつた。苦心の作も俗眼に入らず其業少しも振るはなかつたのを憫れんだ楠本県令が、翁に勧めて東京に移らせたが、碧山と号したのは青山御所の唐机を修繕されてからだと聞く。嘗て聖武天皇御遺愛の古琴を模する勅許を受けた時、漆の部分は翁が擔任された。第二回内国勧業博覧会に、四曲小屏を出品し、其精巧と高価とに紳士を驚かしたといふが、それは今宮内省に納まつてゐる。翁は新潟で獲た乾漆の観音像を愛蔵し、非常の高金で乞ふものあるも決して手離さなかつた。当時翁の座してゐる畳は摩り切れ、紙に糊して覆ひ置くほど窮迫してゐたから友人の高森碎巌、西田春耕、鈴木順丈の諸氏が之を以て衣食に換よと勧めたが、貧は我家の常である。今此像に別れては何を楽しみに生きやうと翁は頻りに惜むので、遂に勧告をやめたといふ。私が十数年間心がけてゐた十六羅漢の印龕を作つて貰はうと東京下谷に翁の宅を訪ふた処、翁は観音像に向つて永々と礼拝してをられたが晩景であるから大いに困つた。見れば像は五寸ばかりで小さき千体仏が幾十となく周囲に置かれてある。やがて翁は座右にあつた盃を取り御茶代りとしてさゝれたが、帰る時に青貝入りの小さき香合を贈つてくれた。謹んで拝見せうとすると、マア〳〵帰宅の上ゆつくり御覧下さいといはれた。爾来上京毎に訪問したが翁の逸話は頗る多い。その中に新潟からの門生が赴いた時、邸前の小さき空地の一隅に柿の葉其他枯葉の堆かいのを見つけて綺麗に棄てゝしまつた処、家内がみつけてそれは毎日こゝで座禅をされる所であると注意され恐縮してゐると、翁が聞きつけお前はあまり出過ぎたことをする、人の命ぜぬことをするものぢやないと叱られたことがあつたといふ。

（註）岩船の富豪誇国井氏が観音像のために、同邸に小堂を建て安置せんことをはかつたが、金に換るのでないからとて翁も喜んで其意に応じ、大正の初年入仏式を執行し三日間附近へ写経を頒与された。

一〇

(2) 羅漢印と三大家の合作

青山碧山の事は先般も話したが更に附加すべき佳話がある。碧山は新潟から出世して日本の名匠となつた程だから従つて変人でもあつた、明治廿四年春、私は畢世の望みとして十六個の羅漢印を思ひ立ち、まづ島田亮斎に乞ふた、その形大なるは五寸、小なるは二寸、いづれも羅漢各自の風貌躍如として出来たが、其間春と盆とに催促して十二年を要した。斯くて漸く出来上がつた時、故山田寒山氏が来港中なのでその篆刻を引受けてくれたが出来上つた頃小田原の天海禅師が当市瑞光寺で羅漢供養をした際奇縁にも私の羅漢印の開眼式を施行してくれた。それから印龕の木地を新潟で製作したが高さ二尺幅一尺三寸であつた。こゝまで来ると私はこれからの事は碧山氏に相談する外なしと考へ上京して懇囑した。扉は天海禅師撰の瓦礫放光の四字と、伊藤博文公の題せる金色(ママ)結縁の四字を、中村蘭臺が篆書したのを碧山が凸字に彫り、裏は金紫銅の経筒に天然の如意、又一方に蓮と花卉で白漆を用ひ上蓋には蝙蝠と桃、即ち福寿の意を現はし二年ほどかゝつたが、鄭重の荷造りで届けてくれた。この時恰も濱村蔵六を富山天池が同伴して来たので、御馳走に荷ほどきした処、この彫この塗、天下の珍なりと激賞し蔵六先生も、初めて碧山の非凡を知り帰京したら何か注文したいといふのに乗じて、私は同氏にも其裏の経筒に禅語の一句を依嘱した処、早速快諾されたので茲に碧山の作に蘭臺の篆書と、蔵六の篆刻がそろひ三大家の合作となり、今でも之を家宝としてゐる。

（註）この竹香氏に贈つた碧山翁の書簡によつても名人の面影がしのばれ、書も文意も高士の面目が見える、全文を紹介したいが長くなるから省略する、翁は関東大震災の翌年病歿、享年七十八（或は九？）

越後という土地は由来、文人墨客の来遊が多く、篆刻家にしても、五適散人杜澂、立原杏所、四世濱村蔵六、ついで五世蔵六、初世中村蘭臺、山田寒山らが数回にわたって訪れている。明治三六年（一九〇三）山田寒山が新潟を訪れ、木村竹香の依頼により十六羅漢陶像に篆刻をした。正平はこのよう

な環境の中で早くから翰墨風流の薫臭に馴染んだ。明治三八年（一九〇五、七歳）新潟市西堀小学校一年級に入学する。四年級の時小学校が火災にあい鏡淵小学校に転校する。明治四四年（一九一一、一三歳）同校を卒業し新潟尋常高等小学校に入学する。大正二年（一九一三、一五歳）新潟尋常高等小学校を卒業する。大正三年にはすでに『耕香館画賸』の模写があり注目したい。

正平は大正二年（一九一三、一五歳）の頃から父の元で篆刻を始めた。正平の新潟時代の事は、今川魚心子が「印人正平、大愚画人霊山の想い出」（『いしぶみ』第三号、新潟拓本研究会、一九七五年五月）に記述する。

話は昔に遡るが大正八、九年頃、新潟の古町通り四番町の西側、木村竹香印房の硝子戸の店に、父竹香と机を並べて仕事をしていた紺絣の着物をきた正平をよく見かけたが、明治生まれの人は或いは記憶にあるかも知れない。その後私が大正十一年から二、三年、二松学舎在学中に当時東京に遊学中の乙川大愚和尚と一緒に、谷中の寒山寺に山田正平を訪問泊ったことがある。丁度その頃正平は亡き養父山田寒山作の〝羅漢印譜〟の第二刷の印譜作成中であり、その夜は、印を捺す手伝をしたあとで一杯のみながら墨戯で夜を明かしたなつかしい思い出がある。翌朝起きたら正平は庭先で小さなふいごで銅印を作っていたが、そう云えば、大正十三年十二月に春陽堂から発刊された秋草道人の歌集「南京新唱」の末尾の検印〝秋草堂〟は銅印だと思うがすでにこの頃鋳銅もやっていたらしいのである。師の寒山も多芸であったが、生来生真面目な無口な性格の正平は、師の多芸を受けついでおのづと衣鉢は伝えられていたらしい。〝羅漢印譜〟はその後再版を祝して当時の国民新聞の徳富蘇峰が紙上で絶讃の一文を呈していたのを私は読んで多少とも関係した一人として、一入感銘が深かった。（中略）

この寒山と親交のあったのが正平の父木村竹香で、其後古町四番町の家をたたんで宗現寺の別院日和山の回向院に当時本師の命によって独居していた私の二階へ、山文の世話で移り来たり、暫くの間自由な趣味的な生活を楽しんでいた。二階には独居老人、下は独居若人の私、□と老若が或る年の暮、近くの昭楽軒の二階で忘年会をやった事がある。老人中々元気で、座布とんを腹の下に下げてドスコイ、ドスコイと相撲甚句の独演をやって若い私を驚かせた。角顔の白髪白髯の老人であった。

正平も二回ほど父を訪ねて泊ったが、喜美子夫人手製の帙仕立の物容れをみやげに頂いたことがある。其後竹香老人は寄る年波の自炊も億劫になってか、北海道から長男が迎えにきて行ったが、其後歿くなったあとで山文から聞いた。思えばこの竹香と寒山の邂逅によって正平、大愚の巨歩的な印人が新潟に出現したのであった。

又、正平、大愚とは関係はないがこう云うこともあった。竹香在院中に或日大きな背格好な老人と、顔見知りの中山医師と外にも一人、竹香を訪ねてきたが、その老人帽子も脱らず玄関に突立ったまま、竹香の在否をたづねたが、その失礼にむっとしたらしい私は傍らの帽子掛から自分の帽子を取って頭にのせ、竹香老人は不在だと答えたら、何れまたと云って、其のまま一同立去ったが、あとで竹香にその旨話したらそれが会津八一秋草道人であった。どうもそんならしい気はしていたが、はづみとは云え若気の至りであったと後悔した。

正平は竹香の没後、新潟を訪問している。その折の様子は彼が書き残したスケッチブックに詳しい。

大正三年（一九一四、一六歳）正平の最も初期の印とされる「秋艸堂」の竹印と「獅子宮人」の石印の二印が刻される。これは、会津八一から依頼されたものである。正平と八一の交流に関しては以前述べた。[9] 大正三年父と特に親交の厚かった寒山の知遇を得て上京することになった。正平の最も初期の手控え印譜は、一六歳の時に編まれた『梅檀二葉香印譜』である。この印譜の封面に、山田寒山が『梅檀二葉香印譜』と題しており、款記に、「大正三年冬至三日題、正平君印々」とある。これには、正平自用印ほか多くの姓名印、詞句印が鈐印されており、中井敬所（一八三一―一九〇九）の模刻なども含まれている。また、顧湘の刊行した『小石山房印譜』に所収の印も模刻している。この印譜は正平が篆刻を初めてまもない頃のものであるため、正平初期の印風を知る上で格好の資料となるものである。父木村竹香が中井敬所、一世岡本椿所に篆刻を学んだため、正平のこの印譜所載の印はこの二人の影響によると思われるものが少なくない。また、篆刻はかなりの水準の高さを示してはいるものの、さまざまな風が混在しており、模索の時代といえるものである。

彼はこの当時、初世中村蘭臺を尋ねたが、病気療養中のため面会できず、夫人に会っている。初世中村蘭臺について正平は、「書壇新報」第五一号（昭和十二年八月十日）に、「中村蘭臺翁について」として一文を草している。正平の蘭臺像が読み取れる内容となっている。彼の作家論は少なく、それだけに古今第一の印人と称された初世中村蘭臺の評は彼の篆刻への嗜好も伺える。ここに抄録しておく。

明治三十八年の初冬、蘭臺翁は越後新潟の旅舎に居られたが、客と対坐中でも、とかく火箸で灰の上へ配篆の工夫が始まるのが癖であつた。また始つたなと見てゐるうち、そゝくさ別室に去つて軈て刀を使ふ音がする。覗いたら何か異変でも起りさうな緊張振りであつた。

翌日行つて見ると、机上にその印と印影がある。其鈕には箔や緑青が施され古味津々たるもの、支那人の作としか思へぬ印の袴さへも着いてゐる。これが先日迄佛師の物置きに埃でまみれてゐた木片だとは如何して思へよう。客はみな顔を見合せ其神速と鬼工とに舌を捲いた。これは、蘭臺翁とかなり深い交渉のあつた私の実父の実話である。翁のこの新潟遊歴は、殆ど記憶にはない程に私の幼年時代であつた。

私が上京して下谷の寒山寺へ来たのが十六歳の春でこの歳の十月（大正四年）に翁は歿せられたのである。私の上京の際に実父から托された土産物もあり、翁を訪ねたいと云つたところ病臥で誰人にも会はれないとのことであつたが、兎に角、赤坂檜町の御宅へ伺つて玄関で夫人に面会、土産物と自作三寸角許りの印影をお渡しした。すると隣室で呀々とか吁々とかいふやうな声がする。すぐ夫人が玄関へ見えられる。あの印影は貰つておきたいとの翁の意響を伝へられた。これが私の翁の肉声を聞いた最初であり最後であつた。

翁の盛んであつた明治の後半は、我国篆刻界に於いて未曾有の黄金時代であつた。巨匠敬所なほ存し、また香遠、拜石、疇邨の諸老あり、西に桑名鐵城の名を聞く。此間にあつて万丈の氣燄を上げ、光芒なほ燦たるは、丁未印社同人、蔵六、荃廬、蘭臺、寒山、椿所諸家の活躍である。皆一代の巨擘で、截然とした独自の旗幟の下に呼応されたのはいとも華々しい極みであつた。かゝる時代に、翁は、彼は湯上りの美人耳、彼は骨なしと痛罵して、心膽を寒むからしめる腕を発揮されたのだから、

其才分と鍛錬は一朝一夕のものではない。

当時、新聞紙上に発表された翁の作印に対しての評語一二を録す。白文。言語同断。忘荃子曰。似漢刻爛銅。渾然天成。非凡手所能也。印刻鑿太深。疑字險勁。為蘭臺翁作無疑。蘇香盖翁之別號歟。白文。混而知處。高森碎巖曰。雅而嬾。秀而不弱。許實夫譜中。最上乗。混而知處。即可此印也。寒山老衲曰。無物堪比倫。教我如何説。

翁の初期作風は、その師緑雲に近似してゐるが、のち清朝諸家に出入し、更に秦漢を規模し、三代に遡り、つひに一家独自の風を成されたが、特に徐三庚に私淑して、薬籠中の物とされた形跡は蓋ふ事が出来ない。然し晩年の形模脱落した神往の作に至つては、唯観者をして呆然たらしめるもので真に目に全中を見ずと云つた名人の境涯であらう。

歿直前位に、春海、玉堂、荃廬、碎巖、不折、寒山、默鳳、廣業諸家の発起で篆書百幅頒布会を催された。当時その一二種を見て面白いと思ってゐたが、今日見ても変りはない。それは不自由の手でかゝれた面白さと云つた程度でないのは勿論である。

茲に特筆すべきは、翁の工芸方面の開拓で或はこの種の業績が尤も才分を発揮し、盛名を不朽ならしめたとも云ひ得ようか。新潟藤井氏所有の亀鈕の大木印や横山大観氏愛蔵の馬鈕木印などは、印材としての逸品で、其他文房器具、楹聯、木額、さては碌硯から丸彫りの佛像など、総て人を驚かさなければ已まぬ底の物である。

翁は名人肌の人で、その生一本から生れる逸話めいた話も相当あるが、誤解を招いた事もある様だ。

長野犀北館の欄間は、三四ヶ月もかゝつた翁の力作であるが、それは宮様が御台臨になる為め、翁に依嘱したので、署名にも、その意味を書き添へて呉れとの要求であつた。翁は何か心に染まぬものがあると見えて、親友の碎巖にも態々手紙で、自分の意見を述べ、結局、殿下以上の臨御云々で、再三の強要にもかゝはらず一徹を通じて終つたと云ふ。

最後に翁の生ひ立ちと夫人のこと。夫人の子息に語られたのに、翁の厳父は、その姓、須藤、会津藩士、勤王の志があつた為め、主の忿りに触れ自刀、未亡人は遺子三人を連れて江戸に出で、つひに三子各々他家の養子となる。長男次男は芸界で相当鳴らした人ださうで、翁は即ち三

男、浅草方面の船問屋へ養子に遣られ、中村姓となる。易者の言葉に従つて、火に関係ある業とて、始め鍛冶やに行き、転じて緑雲の門に入る。火が朱に変つたとかの笑ひ話があるさうだ。

夫人は私も前述の如く一度御目にかゝつたが輪郭の正しい感じの人であつた。山梨県八代郡で知られた早川氏の女、岳父は蘭圃と号し、好んで文人墨客と交り、自らも南画を描かれた。私も絖本尺五位の山水密画を見たが、優に作家の域に入るもの、これは決して御世辞ではない。現二代蘭臺氏はその間に生れた長子たるは衆知のことである。

正平が東京の寒山寺に来た頃の事が書かれた未定稿とおぼしき文章が残されている。この中で述べる君は誰であるか不明である。正平の二松学舎での生活が綴られている。

大正中期、君と僕とは二松学舎で二三年同僚して学んだ関係である。当時三島復先生が舎長で、中洲老先生には正月に一度、くらい、隣接の三島邸へ行って講話が聞ける程度であった。しかし学舎の講師としては土屋鳳洲、児島獻吉郎、安井小太郎、岩渓裳川など勿体ないような名家が蘊蓄をかたむけての講義がつゞけられていたのであった。この先生達はみんな相続いで物故し給いてすでに遠い昔となって、現在はたゞ那智先生のみ御健在と承る。僕たち当時の少年も今は白髪となってしまった。うけた講義の内容は殆ど忘れ去ったようだが学道に鍛えぬかれた先生達の人柄から受けた感銘はなほ昨の如く強く蘇みがへり、はなはだ貴重のものになっている。中洲先生に接したのは一二度で印象はまことに淡いが、話しの一節に「長生きするにも、すべてにも、無理をせぬことが大切だ」との言葉が耳底に残っていて、折りに触れ思い出すのである。復、舎長が伝習録を、安井先生が荘子を、那智先生が易を講ぜられての環境であってみれば、この一言、今にしてますます含蓄ゆたかに感ぜられるのである。当時、同寮であった学友でいまなほ互に寒暖の消息をたゝない人も二三あるが別した懐かしさは禁しがたい、二松学舎独特の箱めしをつゝき合い、南京虫に悩された仲はどこか血のつながりがあるのであろうか。（未定稿）

山田正平

四　結語

本稿では、山田正平の若年期の生涯と芸術に関して述べた。中でも正平の号の使用に関して明らかにした。また実父木村竹香の資料は意外に少なく、未だ不明な点が多いが、目睹した新資料を提示した。竹香に関しては、更に精査し後稿にて論究したい。

日本の印人の研究は印そのものの芸術作品としての研究とともに、その人と為りが深く研究されるべきであろう。日本の近世以降の書道史を振り返ってみると、印人の存在は無視できない。篆刻は学問と深く結びついており、印人の書画作品は書巻の気や金石の気が横溢しており魅力に富む。これまでの研究はまだその一斑であり、今後も日本印人の資料を広く蒐集し全貌を研究してまいりたい。

本稿を執筆するにあたり山田潤平氏、梅枝氏に種々ご配慮を頂いた。ここに記して謝意を表する。

（注）

（1）拙著『篆刻学』（『中国書道史を学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇二年九月）三〇九～三二九頁

（2）拙著『高芙蓉の篆刻』（木耳社、一九八八年六月）一～三九六頁

（3）筆者はかねてより「日本の印の文字造形に現われた時代性と特色」に関して興味を抱いて来た。その試論の一端を述べておきたい。この問題を考えるにあたり、「文字造形に現われた時代性」（杉村邦彦著『書苑彷徨』二玄社、一九八一年十二月）は、その先駆的業績であり参考になる。文字の造形を規定する要因として、素材・寸法・書体・用途・様式美などが挙げられる。特に様式美に関しては、形・線・空間が問題点となる。我が国の印は中国のそれと比較すると、形は不均衡で、線は揺らぎを持ち（これは中国の浙派とは相違し、中太りの様相を呈す。）、空間を大きく開けるのがその特質であろう。そしてそれは日本の他の芸術美と符合する。次に造形は、印の枠、外縁との関係が指摘できよう。中国の印は、旧来のものは印の縁の制約をそれほど大きく受けてはいない。むしろ一字の形の工夫による。日本の印は外縁の制限が強く、文字どうしの引力関係が強い。つまり中国の印はむしろ一字の造形美を主とするが、日本の印は外縁が究極まで意識された文字群による造形美を主とすると言えよう。日本の印の特質は大筋においてこのように考える事ができる。次に朝鮮の文化は、日本の文化と類似点を見出せる。それは中国文化を摂取受容し、

独自の変容をもたらす点である。中国の美は堅固、朝鮮の美は簡素、日本の美は幽美である。中国、日本、朝鮮の美術における様式美は、印にも同様色濃く見られ、美術は地域性、時代性から逃れられないことの証左となっていると言えよう。尚、韓国の印章の研究文献に、『韓国の印章』（国立民俗博物館編著、一九八七年七月）、『盤龍軒珍蔵印譜』（張遇聖編緒、弘一文化社、一九八七年六月）がある。

（4）「山田寒山・正平展」が篆刻美術館において、平成四年（一九九二）十一月三日から平成五年（一九九三）一月二四日にかけて開催された。その折山田正平の十六羅漢陶像と山田寒山の十六羅漢陶像が出陳され話題をよんだ。今後、高芙蓉と芙蓉派展、山田寒山墨竹百幅展、越後印人展、木村竹香展、会津八一を廻る印人展などの開催が期待される。

（5）木村竹香に関する拙稿は次の通りである。

①「山田正平研究―正平と木村竹香―」（「日本書道新聞」第三号、第四号、日本書道新聞社、一九八六年一月二五日、二月十日）

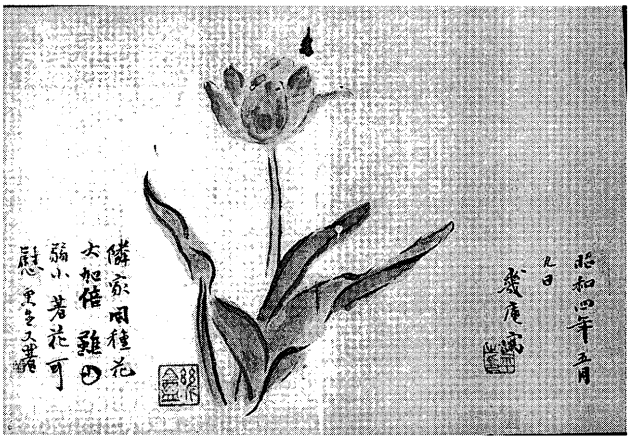
②「山田正平研究（二）―山田家蔵画日記翻刻―」（『修美』通巻五〇号、修美社、一九九五年四月）一八九～一九七頁

（6）『羅漢印譜』は、木村竹香が編したもので、『瓦礫放光』『金石結縁』の二冊から成る。前者は、寒山が明治三六年の天長節の日に、島田亮斎製作の一六羅漢陶像と布袋和尚・観世音菩薩・文殊菩薩に刻した印影をおさめている。後者は、それにちなんで諸家の題字・詩・書・画・印などを集めたものである。『羅漢印譜』は、山田寒山の篆刻の傑作であるとともに、木村竹香と山田寒山という当時一流の文化人の深い交友の証と云えるものである。当時の篆刻の現状の一端をうかがい得るものといえる。

（7）『般若心経』は山田家に所蔵されているが、肉筆本とともに影印本がある。款記に、「癸未二月一五日、為釈竹香欣證佛果、秋艸道人」とあり、これが書かれたのが昭和十八年（一九四三）で、竹香が没してすぐの事であることがわかる。

（8）同新聞資料に関しては、平成十五年度全国大学書道学会福岡大会における研究発表の中で論及する。これは以前山田正平令夫人、ご令嬢から紹介され、全ての複写の許可並びに研究発表のお許しを頂いていた。筑波大学の修士論文で取り上げる予定であったが、機が熟さずとりやめた経緯がある。尚、山田寒山の研究は、小木太法先生、柴田光彦先生、柿木原紫鈴先生、岡村鉄琴先生等が労作を発表されている。本稿においてもその学恩を被った。

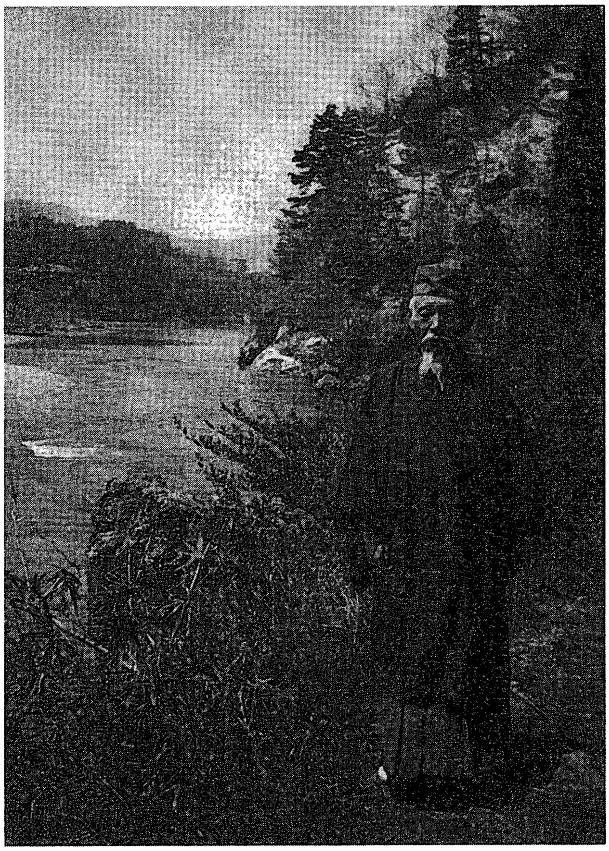
（9）拙稿「会津八一の印学」（『書学書道史研究』第三号、書学書道史学会、一九九三年六月）六五～八六頁



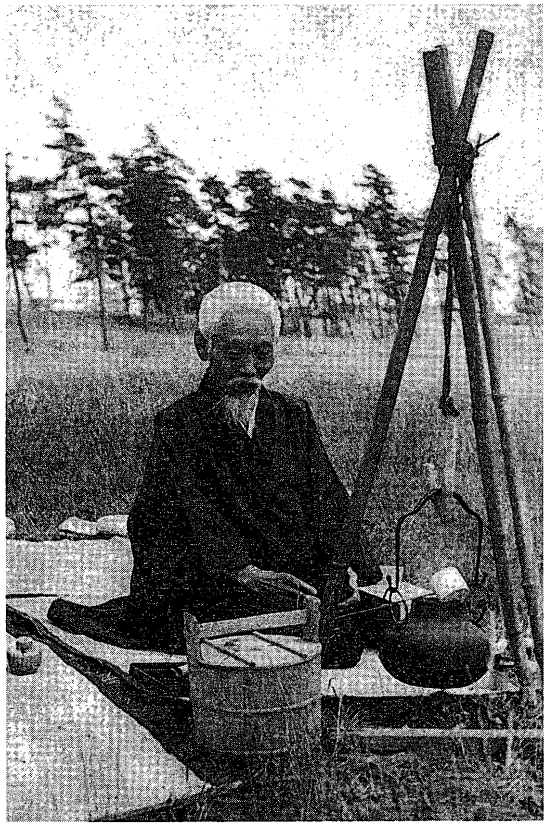
（図１）山田正平画

（図２）木村竹香篆刻

（図３）木村竹香写本２種



（図５）木村竹香肖像（昭和15年５月７日）



（図４）木村竹香肖像（昭和14年７月末日）